地しんで気づいた災害のこわさ

久保小学校　五年一組　友森　悠翔

先日、ぼくが家で家族と一緒にテレビを見ていた時、とつ然ガタガタと家がゆれ始めた。地しんはひどくなくすぐにおさまったけど、ぼくの心ぞうのバクバクはずっと続いた。一しゅんのことだったけれど、だんだんゆれが大きくなって家がぐちゃぐちゃになって、みんな死んでしまうんじゃないかと思ってすごくこわかった。

お父さんが、

「このくらいの地しんでこんなにこわいのだから十一年前の東日本大しん災にあった人達はすごくすごくおそろしかっただろうね。」

と言った。そして、

「だから、お父さんはこの家を建てる時、どこに建てたらできるだけ災害をさけられるかを、下松市のハザードマップを見て考えたんだよ。それと、これから先の大地しんにたえられるように強い家を建てたんだよ。」

と話してくれた。ぼくは少しだけホッとした。

災害は地しんだけではなくて、大雨や台風で近くの川の水があふれて道路や家が水につかったり、土しゃくずれが起きたりすることもある。

ぼくには、笠戸島に住むおばあちゃんがいる。時々車に乗っておばあちゃんの家に行くけど、行くと中、道路の工事をしている所が二ケ所ぐらいまだある。ぼくは三年前の夏、大雨が何日か続いて笠戸の道路が大きな土しゃくずれで通れなくなった時のことを思い出した。おばあちゃんの住んでいる所はこ立してしまい、ぼくもお母さんもおばあちゃんのことがすごく心配だった。でも、島の人達やたくさんの人が協力して、すぐに船で下松まで来られるようになった。ぼくは港におばあちゃんをむかえに行ったのを覚えている。大変なことになっても、船を出してくれる人達がいてありがたいねと、おばあちゃんもお母さんもすごく感しゃしていた。

災害はいつおこるかわからないのがほんとうにこわい。だから日ごろからそなえておかないといけないと思う。

ぼくは今まで何もしていなかった。お母さんはひなんようグッズを入れたリュックサックをじゅんびしている。ぼくも自分と弟のものを入れたひなん用のリュックサックをじゅんびしようと思った。それと、家族でひなんする場所や、そこに行く方法を話し合って決めておきたいと思う。

災害にあうことは人ごとではないのでぼくは本当に起こった時にちゃんとした行動がとれるように、防災訓練には今までよりもっとまじめに取り組んでいくつもりだ。